

## 27 「歌 磨」

藤沢周平の「喜多川歌磨女絵草紙」を読んだ。

藤沢周平は何人かの人を題材に小説を書いているが、彼が描きたかった人物、それはこんな人だった。

新井白石（市塵）、直江兼続（密謀）、小林一茶、雲井龍雄（雲奔る）、清河八郎（回天の門）、上杉鷹山（漆の実のみのる国）、長塚節（白き瓶）そして歌磨だ。

歌磨といえば浮世絵美人画の代名詞のような画家である。

歌磨が描く美人画にまつわる物語で、モデルになる女の素顔などが人生模様を映しながら描かれる。

各短編で登場する女が、絵のモデルという設定で物語が進んでいく。

浮世絵師はその素性があいまいな人が多い。どういう生まれで、どこでどのように生きたのかわかっていない。わからないほど人の興味を引く。

歌磨もその一人である。従って、この物語も藤沢周平の創り上げた一つの歌磨像ということになる。

歌磨は若い頃、とても遊び人だったらしい。しかし、妻「おりよ」と共に暮らすようになってからは比較的安定した生活を送ったようだ。

物語は、名声を得て絶頂期にあり、妻「おりよ」が亡くなってしばらく経ったところから始まる。

歌磨は鳶屋重三郎という版元によって世に出た。

狩野派の絵師「鳥山石燕」について画技を習ったが、22歳のとき北川豊章という名で富本節（浄瑠璃の一種）正本の表紙絵を描き、町絵師への一步を踏み出している。

初めの間は、もっぱら細版の芝居絵を描いていた。そして鈴屋、四ツ又といった版元から、黄表紙（大人向けの読み物）の挿絵の注文が入るようになった。

そうするうちに、江戸で五指に入る版元西村永寿堂から注文が入る。歌磨は心血を注いだ仕事をした。しかし、しばらくすると永寿堂からの注文はぱったり途絶えてしまう。

永寿堂は名門鳥居派の俊才鳥居清長を採用し、美人画の一枚絵を描かせるようになったからである。歌磨は苦い失望を味わった。

失意の中にいた歌磨を拾い上げたのが鳶屋である。歌磨は、これまで役者の似顔絵に限られていた大首絵を美人画に取り込んだ。全身を描くのではなく、顔を中心とした構図により、女の生き生きとした生活や性格、そして内面まで描写した。

「小伊勢屋おちゑ」で大首の美人を描き名声を獲得し、歌磨の人気は不動のものとなったのである。その鳶屋が歌磨に役者絵を描かないかと言ってきた。理由は、老中松平定信による改革（寛政の改革）が始まり、幕府は朱子学以外の学問を禁じ、好色本、一枚絵の取り締まりが厳しくなるためだった。

美人画は取り締まりの対象になるが、役者絵と相撲絵は取締りの対象外である。

鳶屋に対する恩義を忘れたわけではないが、歌磨は役者絵には興味がない。絵師は自分の描きたいものを意のままに描くべきだと考えている。

恩義のある鳶屋の頼みといえども、自分の信念は曲げられない。鳶屋の番頭として、歌磨に役者絵を描くのを頼みに来たのは馬琴である。後に南総里見八犬伝を著わす滝沢馬琴は、このころ曲亭馬琴という名で鳶屋の番頭をしていたのである。

ある日、鳶屋から一枚の絵を見せられ、絵師としての歌磨の意見を求められる。

その絵は役者絵だったが、これまでの「役者」絵ではなかった。役者の姿でありながら、本人の素顔

を突き付けられるようなものだった。それは間違いなく非凡な絵で歌麿は心を揺すられる。

いずれ、この斬新な役者絵に自分の美人画で対抗していかなければならないことを直感する。その絵は写楽のもので、ここに写楽を登場させることにより、この時代の絵師の世界の移り変わりや葛藤を描いている。

「おこん」という名の、鈴屋の茶汲み女を歌麿は描いている。前だれを取っただけの、紺縦縞の青梅織に幅広い鶉色の帯をしめた仕事着のままである。白い肌に仕事着がよく映える。

歌麿はおこんを店から借り出して、鈴屋の二階で絵を描く。借り物だから鈴屋には手間賃を払っている。おこんとは無駄話をしながら筆を進めていく。

どうでもいいような世間話をしている時に、女の内面が浮かび上がって来ることがあり、そうして知った内面が絵に映しこまれていなければならない。

歌麿は、商人の内儀、芸者、山猫なんでも描く。丸顔でも瓜実顔でもかまわない。ただ、透けて見えるような女は描く気にならない。何か見えないものを隠しているような女がいい。

おこんは弾けるような陽気さがあるが、何か計り知れないものを持っている、そんな女である。おこんは、わけあって客の財布を盗り歌麿に助けられた。歌麿は、前に一度自分の小銭をやられたことがあり、おこんの性癖を知っていたのである。

しばらくすると、おこんは鈴屋を辞めてしまう。

歌麿は、おこんを描いた下描を取り出して本画を描いてみた。だが結局は数枚の版下を無駄にただけだった。下描は見たこともない人間のように、眼鼻も口もばらばらな女を描きとめているだけで、おこんの姿を浮かび上がらせるのに、何の役にも立たなかったのである。

不意に歌麿の心におこんに対する憐れみが忍び込んできた。家が貧しく、弟妹が多いというおこんは、恐らくろくな育ち方をしていないのだろう。しかも、いまでも人の物に手をかけるほど貧しい。

そう思うと、美しい顔をした女の盗癖が心を湿らせたのであった。

約束した上野の花見だけは連れて行ってやろうと思った。それだけが、おこんとの間に残された繋がりのように思えたのである。

花見の約束を果たそうと、やっとのことでおこんの家を探し当て訪ねる。するとおこんは所帯持ちで、一つ年下の若い夫は労咳で、一年半も寝たきりで医者にも見離されているのだった。

夫はおこんの絵の完成を楽しみにしていた。

歌麿の気持ちは混乱する。初めて見た頃、おこんは陽気で屈託なく笑う女だった。次には貧しく、手癖が悪い小娘に変わった。そしていまおこんは亭主持ちだという。

初めは、おこんに引き付けられ描きたい衝動に駆られたが、結局歌麿はおこんの絵を完成することはできなかったのである。

( 2 0 1 1 . 9 . 2 8 )